

〈国語〉のふたつのモデル

— マンゾーニとアスコリ

1 国民国家と〈言語問題〉

一八六一年ピエモンテ議会は統一イタリア王国の成立を宣言した。しかし、その統一国家の社会的基盤は脆弱きわまりないものであった。文学者としても知られるピエモンテの政治家マッシモ・ダゼリオは、当時つぎのような名言を口にしたとされている。「われわれはイタリアをつくった。これからはイタリア人をつくらねばなるまい」。統一イタリアは、「イタリア人」をつくりあげるためのさまざまな装置を、社会のさまざまな領域にしつらえねばならなかった。言語もそうした領域のひとつであった。

糟 谷 啓 介

一八六七年一月に文部大臣エミリオ・プロリオは、イタリアの言語統一の手段を講ずるための委員会を設置し、その委員長に小説『婚約者』ですでに名声を博していた文学者マンゾーニを任命した。これにこたえマンゾーニは、同年発表の『言語の一体性についての報告』、一八六九年の『報告への補遺』、さらに他の三編の公刊書簡のなかで、ありうべきイタリアの言語統一の方向をさししめした（ただしこれらはすべて一八四七年に書かれた書簡論文『イタリア語について』の延長線上にある¹⁾）。マンゾーニの言わんとするところを簡略にのべればこうなる。ながいあいだ分裂状態にあったイタリアにおいては、言語統一のために人為的言語政策をすすめるひつようが

ある。イタリア語の核はあくまでフィレンツェの現代口語であり、公教育をつうじてフィレンツェ語を全国に普及させることでイタリアの言語統一をなしとげることができるというのである。このようなマンゾーニの言語計画案には、さまざまな方面から批判の矢がなげかけられた。そのなかのひとりに「イタリア方言学の父」アスコリがいた。アスコリは一八七三年の『イタリア言語学紀要』創刊号をかざるながい序文をマンゾーニ主義批判についてやし、マンゾーニのフィレンツェ中心主義とその人為的言語政策の虚妄性を手きびしく批判したのである。⁽²⁾

しかし、国民国家成立時になってはじめてイタリアで言語の問題に関心があつまつたわけではない。イタリアの言語規範はいかにあるべきかを争点とした論争〈言語問題 (questione della lingua)〉は、十六世紀以来、いやさらにさかのぼればダンテの『俗語論』このかた、まったく決着のつかないままもちこされてきていた。たしかにかつて〈言語問題〉は文学語の規範についての論争であったのだが、それが十九世紀にはいるとしだいに社会的次元での国民共通語のありかたをめぐる議論に移行していき、マンゾーニとアスコリの論戦におよんでその

頂点にたつたわけである。⁽³⁾

したがってイタリアの言語統一をめぐるマンゾーニとアスコリとの対立をながめるためには、当時の言語的社会的状況だけでなく、数世紀にわたる〈言語問題〉の文脈を参照しなければならぬのであるが、この論文ではむしろわたしは、マンゾーニとアスコリとの対立、ひいては〈言語問題〉をイタリアに特殊な事例とのみかんがえずに、むしろよりひろい問題系のなかでながめてみたい。ラテン語からの俗語の自立と俗語内部での規範設定の問題にかんして、十五・六世紀の言語問題における議論が参照的価値をもつように、マンゾーニとアスコリの対立は国民国家における言語規範のありかたをめぐる問題にたいしてかけがえない視点をさしだしてくれるはずだ。ただし重要なのは、できあいの社会言語学的枠組みを外側からあてがうことで、これら両者の言語思想を整理し分類することではない。むしろかれらの問題提起のなかから内在的に問題をうかびあがらせるべきなのだ。イタリアの〈言語問題〉の比類ない意義はつきのことにある。そこではただひとつの言語的立場が他の立場を圧することなく、つねに言語規範をめぐる複数の言説が

たがいに拮抗しあっているため、他の国の場合ならば暗黙の了解事項としてすまされたり、制度的保証のもとに事実のなかで解消してしまいがちな言語イデオロギーが、あらわに露出するということだ。たとえば、〈言語問題〉においては、「イタリア語 (lingua italiana)」という名称じたいが、論争性をおびた言語的立場をしめす概念としてあらわれる。ながいあいだそれは、フィレンツェ語あるいはトスカナ語——このふたつの名称をめぐってさえ議論がおこったのだが——の中心性と優越性を否定する概念であった。だからマンゾーニがまずおこなわねばならなかったのは、「イタリア主義者 (italianisti)」とたかかって、「イタリア語」という概念の中身をかえることだったのである。

「X語」という対象の自明性は、歴史のなかでつくりあげられるものだ。「わたし(たち)はX語を話す」という真でも偽でもないおそらくは信念の表明である命題が、自明の真理とみなされるようになったとき、X語という対象が社会的に設定される。こうして、X語について語るあまたの言説——そのなかには科学的装いをこらした言語学の言説もふくまれる——がX語という対象を

たえず再生産しつづける。X語の等質性は、じつはX語について語る諸言説の等質性がうみだす効果にほかならない。

〈言語問題〉は、そうした言語についての言説がつねに複数存在するがために、言語の自明性が崩壊してしまう場なのである。

2 言語と方言

ことばにかかわるものであっても、言語学がすっかりと答えをあたえてくれないような問題があるものだ。言語と方言とのちがいはなにかという問いもそのひとつである。けれども、「言語」と「方言」という概念自体が歴史的なものであり、概念そのものもそれらのあいだの関係も、ことばをとりまくさまざまな社会的力関係のなかで変容していくのである。

それではイタリアではどうか。イタリア語概説書をひらけば、つぎのような文にいきあたることはまれではない。「現在においてもまだイタリアで日常的に話されている言語は……イタリア語ではなく方言である」(傍点引用者)。まるで方言はイタリア語ではないかのようである⁽⁵⁾

が、このような概念設定こそが、イタリアにおける言語と方言との関係を直截に示めてくれるのである。

言語と方言とを区別するために、方言というものを規範言語の地域的変異として定義するならば、イタリアの諸方言は「方言」ではないことになる(そうした地理的変異は「地域イタリア語 (italiano regionale)」というべつのカテゴリでとらえられている)。イタリアの諸方言は「統辞と音韻の構造においても語彙においても、共通イタリア語とは根本的にことなつた言語」(傍点引用者)であり、言語体系そのものからみるなら、それらはイタリア語の基礎となつたトスカナ語と対等の地位にたつラテン語の末裔なのである(たとえば、イタリア諸方言の母音組織の言語的特徴を把握するためには、標準イタリア語よりもむしろラテン語を参照したほうがよい)。イタリアの方言は、けつしてイタリア語の方言ではないのだ。そして現在イタリアの「方言」について語る事ができるのは、ひとえに社会的機能と威信の問題でしかない。しかし歴史的にみれば、それらの面でも「イタリア語」は、イタリアの諸方言を包みこみ従属させるだけのちからをもつてはいなかつた。したがつて、問題をほら

むのは、「方言」の概念ではなく、むしろ「イタリア語」という存在の特異な歴史性のほうである。

デllマウロは、当時の統計資料から推定して、イタリア統一時にイタリア語を話せたのは総人口の二・五パーセントにすぎなかつたといふ⁽⁷⁾。数値のひくさにおどろくよりも、かれがどうやつてその数値をひきだしたのかをみるほうが重要だろう。トスカナとローマでは共通語にちかひことばが話されていたので、「文盲でない者」はイタリア語が話せたとみなす。そしてそこに全国中等学校の就学者数と修了者の推定数をくわえたのがうえの数値になるといふ。つまり、イタリア語能力は読み書き能力の直接の反映だつたのだ。

けれども、その二・五パーセントの者が日常生活でイタリア語をもちいていたかどうかはまた別問題である。すぐれた雄弁家として知られるビエモンテの宰相カヴールは、イタリア語ではたどたどしい演説しかできなかつた(かれが得意としていたのはフランス語である)⁽⁸⁾。イタリア国王ヴィットリオIIエマヌエーレは閣議でさえビエモンテ語をもちいていた⁽⁹⁾。このような例をあげていけばきりがなひ。じつはトスカナとローマ以外では、貴族

もブルジョワジーも日常生活ではイタリア語を話してはなかった。社会階層にかかわりなくだれもが方言を話していたのである。そのうえ方言は、実用散文から文学にいたる書きことばの機能と、それにとまなう社会的威信を手にしてきた。数ある地方の中心城市では方言は十全たる文化言語の地位にあった。「イタリア語」は、古典文学の修行をへたものだけが手にすることのできる文学語、学究語として存在していた。イタリア語は書物のそとでは生きられないことばであったのだ。しかもその「イタリア語」じたいの規範がどうあるべきかにかんして、文学者や知識人のあいだで意見の一致はなかったのである。

こうしたなかでマンゾーニがとった立場はおどろくべきものであった。というのは、マンゾーニはまず言語規範をあくまで言語の共時的機能のなかでとらえ、さらには言語と方言の区別を廃棄したからである。

マンゾーニによれば、言語の本質は特定の社会生活のなかのたえまない日常的コミュニケーションの道具としてもちいられるということにある。文学伝統の有無も、言語の地域的ひろがりも、言語の本質にはなんらかか

りがない。言語と方言の対立がありうるるとすれば、それはひとつの共通語が国民の大部分とくに文化的階層にうけいられ、その他のことばがそれぞれの地方の社会的にひくい階層での使用に限定されるような状況のもとにおいてだけである。ところがイタリアでは、社会のあらゆる階層がつねにその土地のことばを話している。つまりそこでは言語と方言との対立は存在しない。したがって、マンゾーニの結論はこうなる。「本質においてそれ自体でかんがえるなら……イタリアの諸方言とよばれているものは、まさしく万人の常識が言語とよんでいるものである。」⁽¹⁰⁾

けれどもマンゾーニは、イタリアの諸方言の地位を擁護しようとしたのではない。このように独立した言語が乱立するイタリアの言語状況のなかに国民共通語をうちたてるためには「多様性を単一性におきかえること」⁽¹¹⁾、つまり、現在ひとつの社会で話されていることばを規範

として採用し、すべてのイタリア人にそのことばを身につけさせねばならない。そのことばこそ現在のフィレンツェ語慣用にほかならない。つまり、マンゾーニはフィレンツェという一都市の「方言」をそのまま「国語」に

昇格させうることをしめす論拠として、言語と方言との区別をとりはらったのだ。マンゾーニにとって言語統一のモデルはつねにフランスにあったが、そのフランスでさえ国語としてのフランス語はもともとイルドドフランス地方の方言にすぎなかったことをマンゾーニは強調してやまないのである。

このようなマンゾーニのみかたにたいし、アスコリはふたつの点で反対する。ひとつはマンゾーニのフィレンツェ中心主義にたいして、もうひとつはマンゾーニがフィレンツェ語という「方言」をそのまま「国語」に昇格させようとすることにたいしてである。

アスコリは、現在のフィレンツェはけっして言語的中心になりうるような文化的威信をもっていないという。イタリア語はたしかにその歴史的な基盤をフィレンツェ語に負ってはいるが、イタリア全土にひろまるうちに、各地の方言要素をとりいれて超地域性を獲得した。いまになって言語規範をひたすらフィレンツェ語にもとめようとすることは、言語の歴史性にさからったあまりに人為的なくわだてである。もとめるべき国民共通語は、どの地方の方言にもゆいいつの基盤をもとめず、それぞれ

の方言のなかから標準型を「自然的選択」によってさだめていくことによってのみ生まれる。つまり、方言から共通語への昇格は、たんにフィレンツェ語だけの特権ではなく、イタリアのあらゆる方言にひらかれた道であるということだ。⁽¹²⁾

しかし、アスコリはマンゾーニとはぎやくに、言語と方言とのあいだには社会的機能の区別があるべきであるという。国民全体に語りかけるべき場で、一地方にしかつうじないなれなれしいことばをもちいることは、「真正銘の氣どり」にしかならない。国民的共通語は、あらゆる方言からの寄与にささえられながらも、方言のもつ狭隘な地方性を払拭しなければならぬ。さらにアスコリは、極度に知性主義的立場から、国民文化の科学性をささえるべき共通語は「反省」の世界のことばであるにたいし、方言は「本能」の世界にとどまっているとさえいうのである。⁽¹³⁾

こうしてみると言語と方言との関係をめぐるマンゾーニとアスコリの態度は、はなはだ複雑であることがわかる。マンゾーニは言語と方言との区別を廃棄することによって、そのなかのひとつの言語だけを特権視すること

ができた。アスコリは言語と方言との上下の序列をみとめることで、かえってイタリアの言語の多様性のなかからの内在的な共通語の発展をゆめみた。おそらくこの矛盾はだれにもとくことはできないだろう。「国民共通語」という幻影があるかぎりは。

3 話しことばと書きことば

ある言語が文学伝統にささえられ、辞書や文法によって規範化されていたとしても、その使用がいくつかの表現領域にのみかぎられ、はばひろい社会的機能を獲得していないことがありうる。まさに統一時のイタリア語はそうしたばあいであった。言語規範が「国民」全体の〈話〉の領域にも規範力を行使できるようになって、はじめに「国語」の体制が完全に確立したということができる。近代国家において方言と少数言語にむけての抑圧政策がうまれるのは、言語規範があらゆる〈話〉の領域を包括しようという権力意志をはらむからである。(そしてこの過程は、言語学がその対象をしないで〈話〉の領域におろしていく過程と平行している。)

けれども、言語規範があらゆる社会的領域にわたって

拘束力をもつようになるためには、つぎのふたつの要求をみたすことがひつようになる。ひとつは読み書き能力をはばひろく普及させることで、話し手住民を規範力のみなもとである書きことばの世界に参入させること、もうひとつは言語規範そのものを話しことばの領域に接近させることで、日常の場面においても規範の拘束力がはたらいていることを話し手に意識させることだ。つまり〈書〉の世界の拡大と〈話〉の世界の前景化というふた

つのことなる方向の要求があらわれてくる。それではマンゾーニとアスコリはこの問題にどう対処しただろうか。ここでもマンゾーニの見解は衝動的だ。うえでみたように、マンゾーニによれば、言語の本質的機能は一定の社会における日常的コミュニケーションの道具となることである。つまり言語の本質はひとえに話しことばのなかにある。マンゾーニが言語規範をあくまで共時的機能の問題としてとらえ、文学語による規範設定をこぼんだのは、このような〈話〉の絶対性の確信があったからだ。マンゾーニの主張はさらにつきすすむ。マンゾーニによれば、そもそも「書きことば」という言いかた自体が正真正正の語の誤用にすぎない⁽¹⁴⁾。「話しことば」(三)

gua parlata)』と云つて「書くことば (lingua scritta)」があるとかんがえるのは、「言語 (lingua) についての混亂した觀念の結果であり原因」なのである。書きことばとしてしか存在しえないことばとは、もはや言語の名にあたらない。この点からみれば、純正主義者 (puristi) がたたえるトスカナ文学語であれ、イタリア主義者 (italianisti) が主張する超地域的的文化語であれ、書きことばとしての機能しかもたない以上、本質的な言語の資格を喪失してしまふ。マンゾーニは、「書くこと」と「書かれたもの」に至上の価値をおくイタリアの言語伝統を根底からくつがえそうとしたのだ。マンゾーニはこう言う。「書くことは十全な社会的交流の手段ではないし、そももなりえない」「言語を生活のあらゆる用途にもちいる社会、つまりその言語を話す社会なくして、どうして言語が存在しうるだろうか」(傍点引用者)。

マンゾーニがこのような徹底した認識に到達しえたのは、一方では伝統的文学語がまったく社会的機能を欠いていることを痛感していたからであり、他方では言語統一の問題を話しことばの次元にまでおろしてかんがえていたからである。わたしたちになじみのふかいことばで

いうなら、「言文一致」と「標準語制定」の問題がわちがたくからまりあつていたということだ。けれどもこれはさして不思議なことではない。言文一致は、あらゆる地域のあらゆる場面で話されることばをそのまま書きことばとして成立させることを目ざしたのではない。話しことばのなかに一定の標準型をみとめ、それをもとに国民共通の書きことばを確立しようとしたところにその本質がある。「言文一致といふのは標準語を文に書きあらはすことである」という主張はそこからでくる。言文一致を表現の可能性の探究としてでなく、言語政策的観点からだけみるならば、言文一致の民主性と標準語制定の抑圧性はじつは紙一重のところにあつたのだ。マンゾーニの言語政策のもつ二面性——話しことばの絶対化とフィレンツェ中心主義——は、このような言文一致と標準語制定との内的連続性からうまれるのである。

こうしたマンゾーニにたいして、またもやアスコリは全面的に対立する。マンゾーニが単一言語主義をとるフランスをつねに言語統一のモデルとみなすのにたいし、アスコリは多元主義的なドイツを理想とする。アスコリは、ドイツがイタリアとおなじように過去ながいあいだ

政治的分裂にあり、そして「その方言が数かぎりなく多様であるにもかかわらず、……確固として強力なことばの統一性を手にしている」⁽¹⁸⁾のは、書きことばをつうじて広汎な国民文化が形成されたためだとみる。アスコリはドイツの状況を念頭におきながらこう言う。「何百万人もの人々がペンを活発にはたらかせるときには、交流はきわめて迅速で複雑で高尚でみのあるものとなる。共通のものとなった知識の集積は、おどろくばかりに拡大し洗練され強化されるため、交流をかわす人々の結合と連帯は思考の領域にまでたかめられる」⁽¹⁹⁾。こうした文化のレベルでの「創造的同意」がないままに、人為的手段で言語統一をはたそうとするならば、言語規範は形式的なものとなり、むしろ社会と文化の発展を阻害するものとさえなる。そして、そうした文化活動の高揚をひきおこすためには、どうしても話しことばより高次のレベルでの社会的交流が必要になる。マンゾーニとアスコリは、国民共通語をつくりだすためには生きた社会的交流が必要であるという認識では一致していた。けれども、その交流の媒体を前者は話しことばに、後者は書きことばにもとめた。このちがいは社会的交流というものを、マン

ゾーニが生活に密着した日常的コミュニケーションの領域でとらえたのにたいし、アスコリは社会全体におよぶ知識活動の領域でとらえたことからくる。

アスコリは、旧来の伝統的文学語を維持しようとしたのではない。アスコリのもとめる社会全体の「創造的同意」にささえられた共通語という概念からもっともへだたっていたのが、ほかでもないイタリアの文学語のすがたであったからだ。けれどもアスコリは、国民的共通語の実現のためには、「話しことば」から「書きことば」への跳躍——それは「方言」から「言語」への跳躍と平行する——がどうしても必要だとかんがえていた。

したがって、アスコリは書きことばと話しことばとのあいだには必然的にへだたりがうまれることをみとめているのだ。しかしそれは、アスコリがマンゾーニとちがいに話しことばでのレベルでの画一的言語統一をもとめないことと裏表になっているのである。

しかしそうかといって、マンゾーニが言語の本質を話しことばの共時的機能にみたという認識の先駆性は評価してしすぎることはない⁽²⁰⁾。マンゾーニは、言語を文学伝統の重荷からふりはらい、ことばに自由な空間をあたえ

ることだれよりも貢献したのである。ただしそれがあてはまるのは小説『婚約者』に結実したマンゾーニの言語実践であって、かれの言語政策ではなかった。

じじつマンゾーニの言語政策には致命的な矛盾がある。あれほど〈話〉の世界の絶対性を表明したマンゾーニが、フィレンツェ語慣用をイタリア全土にひろめるために重視する手段は、なんと〈書〉の世界の至高の代表ともいうべき辞書——フィレンツェ語慣用にもとづく『新辞書(Novo vocabolario)』⁽²¹⁾——であったからだ。オングがいうように、辞書の項目として記載されるのはいかなるコンテクストからも剝離した語であるが、その言語剝離術は、〈書くこと〉⁽²²⁾がはじめて可能にするのである。

4 単一言語主義と複数言語主義

この節の題名にかかげた概念は、ふつう一国家の内部で法的にみとめられた言語がただひとつであるか複数であるかという言語の集権制と連邦制の対立をさすものとしてもちいられるが、ここではそうした言語政策的次元よりも、むしろ言語というものの存在様式をめぐる議論に焦点をあてたい。

マンゾーニは、言語と方言とのちがいを解消し、話したことばと書きことばの差異をみとめず、国語のゆい一つの基盤をフィレンツェ語にもとめた。このようなかんがえの根本には、言語を徹底的に一元化しようとする意志がある。しかし、その一元化の意志は政治的な要請だけからくるものではない。それは言語の本質をめぐる言語哲学的考察にもとづいているのである。

マンゾーニの言語思想全体をささえているのは、言語はその本質として〈一性性(unita)〉をもたねばならないという把握である。その〈一性性〉は、言語が一定の社会のあらゆる階層の人々があらゆる場面でもちいるコミュニケーションの道具となることによって獲得される。つまり言語が存立するための条件は、言語が社会的機能と談話領域の全体を包含することによって社会との完璧な同型性をもつにいたるということだ。

そして言語に一性性を付与するのは、「社会的同意」がささえる「慣用(usus)」である。この「慣用」という概念は、言語規範の構成要素のひとつとして、ヨーロッパ言語思想史のなかでたびたびひきあいにだされてきた(もっとも有名なのは十七世紀フランスのヴォージュラ)。

そのなかでもマンゾーニの解釈は異彩をはなっている。

マンゾーニのいう「慣用」は、文学者や教養人の言語的権威にも、過去の言語伝統にも依存しない。「言語の真の全体的慣用」とは「結束し共生する住民のなかでおのずからうまれる〔社会的〕関係の全体によってつくられた記号の全体⁽²³⁾」である。共時的機能性と社会的全体性こそ、言語の「慣用」の本質をつくる。こうしてみるなら、マンゾーニの単一言語主義は、言語の本質を社会的コミュニケーションのなかにとらえ、かたくななまでに言語の機能的限定化をこぼんだことの帰結なのである。

イタリアに存在するのは個々の地方の多様な方言だけであって、イタリア全体には統一的な慣用にささえられた一体的言語は存在しない。そこでマンゾーニは、フィレンツェ語をすべての地域で採用させ、さまざまな多様な諸言語をひとつの中心に収斂させることによって言語統一をなしとげようとした。そのためにマンゾーニが提案するのが「言語のおきかえ」なのである。マンゾーニがそのように少々耳ざわりな表現をもちいたのは、マンゾーニが人為的言語政策の必要性を説いたためばかりでなく、この言語の本質としての一体性という理論的要請

からくる。マンゾーニにとって、二言語使用や複数の言語の機能分担による併存は、過度的であるとともに異常ともいえる状態なのである。社会がコミュニケーションの全体性と連続性を保持しようとするかぎり、言語の一体性はおびやかされてはならない。「言語はひとつの全体として存在するかしないかのいずれかである⁽²⁴⁾」からだ。出発点としてフィレンツェ語がもっていた一体性は、なんらの断絶もなくそのままイタリア語の一体性へとむすびつかねばならない。一体性は「言語の生命であるとともにその普及の条件⁽²⁵⁾」だからである。

これとくらべてアスコリの言語認識はまことに対照的だ。たしかにアスコリは、言語と方言、書きことばと話しことばのあいだに一定の区別と機能分担を想定している。けれどもそうかといってアスコリが「ダイグロシアの状態を制度化する道をえらんだ⁽²⁶⁾」とみることはできない。ダイグロシアとは、上層言語と下層言語とのあいだに完全な機能分担がおこなわれ、話し手の社会階層においても、談話領域においても、ふたつの領域がまったく干渉をおこすことなく静態的に対峙しあっている状態をさす。その意味で十六世紀以後はイタリア語と方言とが

ダイグロシアの状態にあったといえる。⁽²⁷⁾けれども、アスコリはそうした静態的二層言語状態を打破することをめざしていたのだ。

アスコリのいう共通語は、静止し固定した言語モデルではない。共通語はさまざまな方言との接触にさらされることで、たえず変容の過程にある動態性を獲得する。たしかに言語と方言、書きことばと話しことばのあいだには一定の機能分担があるが、それはそれぞれが外部との干渉をもたない閉域をつくるということではない。言語という存在の多様なあらわれを一元的次元に還元することなく、動的な相互作用をつくりだすことがアスコリのもくろみであった。

じつはこのような把握は、歴史言語学におけるアスコリの「基層 (sostrato)」理論の実践的帰結なのである。基層理論はたんにふたつの言語——上層と基層——の接触から生まれた言語の歴史的变化の現象を説明するだけのものではない。基層理論が前提としているのは、言語変化は複数の言語的力さらには社会的文化的力の相互干渉からうまれるという社会言語学的な認識である。個別言語の存在は、そうしたさまざまな力の相剋のなかの均

衡状態をさすのだが、そこにあっても言語はけっして静態的同質性をもってはいない。個別言語とは、複数の言語的作用、さらに社会的文化的作用の相互干渉によって形成された「複合的言語ブロック」⁽²⁸⁾にはかならない。上層言語であるイタリア語がたえず基層言語である方言からの反作用をうける以上、ひとつの言語がべつの言語に「おきかわる」ことはありえない。アスコリは、言語を一元的次元に還元することを徹底的にこばむことによつて、「言語のおきかえ」をめざすマンゾーニの言語政策の無効性を説くのである。

マンゾーニは単一言語主義をとるフランスを言語統一の理想とかがんがえていたが、その点でもアスコリは手きびしい批判をなげかける。たしかにフランス語の統一はパリの言語の支配のもとで確立された。しかし、画一的言語規範を課すことは、なんら精神の運動をよびおさないできあいの鑄型をさずけることにもなる。「そうしてステレオタイプができあがると、思考を麻痺させ、自発的なものをほとんど自動的なものにしてしまう」(そうなるとうつうの人間でも「食べものを入れるための切り口」とは言わずに、「栄養摂取の要求により必要とさ

れた外科切開」と気がるに口にさせるようになる。アスコリは皮肉っぱくのべている⁽²⁹⁾。

いかに伝統的文学語から断絶して、生きたフィレンツェ語慣用を採用したとしても、それがひとたび拘束的規範として強制されることになれば、かつてのクルスカ・アカデミーの「古典主義の理念」にかわる「民衆追従主義 (Popolanesimo)」というあらたな形式主義がうまれるにすぎない。対象がかわるにせよ「偶像崇拜にはかわりがない⁽³⁰⁾」。それは精神の自発性を殺すことで、真の共通語の実現への道を閉ざす結果となる。こうしてアスコリは言語規範における単一的モデルの有効性を否定するのである。

この観点から、アスコリはイタリア語と方言のバイリンガリズムを積極的に評価していくのだが、それは言語教育にかんして重大な帰結をよびおこす。アスコリは、一八七四年の第九回イタリア教育者会議における報告でこうのべている⁽³¹⁾。方言をはなす子どもたちにとって、イタリア語は母語ではなく「べつのあらたな言語」である。けれども、イタリア語をおしえることは、方言という一次の土台を根絶することではない。イタリア語は、つね

にその地方の方言との比較対照をつうじて学習されねばならない。したがってそれぞれの方言にあわせて地方ごとに教科書も教授法もことなるものとならねばならない。こうしてアスコリは画一的国語教育をしりぞけるのだが、それは方言擁護の意図だけからくるのではない。イタリア語と方言との比較の作業によって、科学的思考の基礎となる精神の分析能力がはぐくまれるというのである。

だからトスカナのように共通語と方言がちかい地方では、「言語と思考現象についての反省」をよびおこすような特別な手段さえもとめられる。アスコリが「二言語併用の子どもたちは知性の次元において特権的な地位にある⁽³²⁾」というのはこのことだ。日常性をおもんじるマンゾーニが単一言語主義をとるのにたいし、アスコリはその科学的知性主義によって、かえって言語の多様性を重視するというおどろくべき逆説がそこにはある。

このように、マンゾーニとアスコリの対立は、たんに言語政策上のものではなく、言語の単一性と複数性をめぐる言語思想的な対立でもあったのだ⁽³³⁾。

5 散文の近代あるいは散文的近代

マンゾーニの『婚約者』はイタリア最初のリアリズム小説だとよくいわれる。しかしその文学的リアリズムは、じつは意識的な言語の虚構のうえになりたっているのだ。小説のなかで十七世紀のロンバルディア人がフィレンツェ語を話すという点は、ここでは問わない(ただしこの関係の不可逆性は問題にしよう)。むしろ注目すべきは、小説の登場人物のあいだには、社会的階層のちがいがあるにもかかわらず、現実にはありえないような言語的同質性が一貫しているということだ。「フェデリコ枢機卿とレンツォのような農民とのあいだの〔ことばの〕ちがいをことさらきわだたせることは、マンゾーニにとってなら重要なことではない。レンツォは読むことはできてもほんのすこし、書くこととなるとまったくお手あげであるのに、トスカナ語特有の破格構文さえつかつてりっぱなトスカナ語で話すのである」⁽³⁴⁾。マンゾーニは、現実のフィレンツェ語慣用のなかにさえ、階層や場面においてた言語変異があることをみとめざるをえなかった。マンゾーニの理想とする「一体性」が貫徹した言語があ

るとすれば、それは現実のフィレンツェ語よりも、『婚約者』の言語世界のほうがふさわしい。『婚約者』は、ベネディクト・アンダーソンのことばをかりれば、マンゾーニにとって、さらに読者として想定された「国民的公衆」にとって、「想像の言語共同体」をつくるのである。

マンゾーニはあまりに修辭性にみちた伝統的文学語が、具体的な社会生活を描写し近代的な観念を表現しようという型をそなえていないことになやみつづけてきた。草稿『フェルモとルチア』から『婚約者』二七年版をへて決定稿である四〇年版にいたるマンゾーニの創作過程は、そうした伝統的文学語から断絶し、近代的散文をつくりだすための文体変革の過程であるが、それは同時に言語規範そのものの変革をも射程にふくんでいた。なぜなら、マンゾーニがもとめる近代的散文は、「文学的權威の言語ではなく、話し手と書き手の共同体全体にぞくする匿名的言語」⁽³⁵⁾からのみうまれるからである。

アスコリは、マンゾーニが『婚約者』でなしとげた平明で自然な文体を称賛してやまない。アスコリによればマンゾーニは「イタリア文学つまりイタリアの頭脳から

レトリックのふるぼけた癩を一掃する⁽³⁷⁾」ことにだれよりも貢献したのである。じじつアスコリもマンゾーニとおなじように、近代的散文の確立がイタリアの言語改革には必須の課題であるとみる。さらにアスコリは、それとともに言語規範だけの問題とはとらえず、文化全体の変革をも射程にふくまねばならないとかんがえる。なぜなら、伝統的イタリア文化にひそむ「文化密度の希薄さ」と「形式への過剰な配慮」という病根こそが、「イタリアがいまだに堅固で安定した散文、統辞、言語をもっていない」ことのふかい原因をなしているからである。⁽³⁸⁾

マンゾーニとアスコリがめざしたのは、話し手にひろく共有されるにたる標準的文体をうちたてることにより、言語全体の存在様式を変革することだった。この点でマンゾーニとアスコリに共通する第三の敵がいたことをわすれてはならない。それは伝統的文学語を至上の言語規範としてとらえる純正主義者、古典主義者たちである。たとえばファンファーニは、マンゾーニの要求する言語統一は不要なものであるとしてこういう。「〔言語〕統一はもうすんでいる。なぜなら文学語はイタリア全土で同一のものであるからだ」⁽³⁹⁾。またイエズス会の雑誌『カト

リック文明』は、文学伝統にささえられた「すぐれた言語」を「野卑な農民、商店の奉公人、道にたむろす悪童ども」に教える必要はないという立場からマンゾーニ批判をくりひろげた。⁽⁴⁰⁾このような純正主義的立場は社会的にもひろい基盤をもっていた。とくに南部の教育界は、クルスカ・アカデミー以上に復古的な言語的純正主義と精神的愛国主義とをむすびつけたカプア学派の影響下におかれていた。⁽⁴¹⁾したがって、社会階層的秩序にささえられた旧来のダイグロシヤ的言語体制の変革は、必然的に文体様式の変革なくしては不可能であったのだ。

デーサンクティスは、『婚約者』の文体が平明な自然さをもっているのは、それが「事物との完璧な類似、そのかぎりなく正確であるがままの表現」という言語本来の目的を十全に達成しているからであると評している。しかし、こうした言いかたの底には、「真実はコトバではなくモノのなかにある」というありきたりの近代の認識論がある。ことばは主体の意識と客体的事物のあいだに介在しながらも、「認識の光」をさえぎらないようにみずからを無化しなければならないというわけだ。レトリックは、ことばの向こうにある事物のすがたをうつし

ださず、ことばとしてのことばをきわだたせるという思
むべき技となる。近代的散文は、ことばがたんなること
ばであることを長怖することばなのである。

近代的散文の問題は、言語の〈中間体〉の問題、文体
的無徴性の問題に帰着する。つまり言語的作為のあとを
まったくとどめないようなことばとはなにかということ
だ。話し手にも聞き手にも、さらにコンテクストや発話
場面にも依存せず、それらの要素は無規定のまま、そ
の分だけ指示対象への志向が優越する言語様式が成立す
ること、それが近代的散文の成立の意味である。つまり、
事物の忠実な表象は、こうした言語機能の特殊な配置が
もたらす効果なのである。ある種の散文形式が事物を忠
実に記述しうるようにみえるという事態は、複数の文体
様式の機能的相互関係によってさだまることであり、け
っして特定の文体と客体的事物との関係の内的固有性
によるものではない。

ゆいいつの世界が存在し、それを忠実に記述しうるた
だひとつの中立的な言語様式が存在するわけではない。
ことばというはじめもおわりもない織物のうえに、なん
らの序列もなくさまざまな様式が並列的に散在している

にすぎず、それぞれの様式はそれぞれのやりかたでの
「世界制作の方法」(ネルソン・グッドマン)なのである。
これは様式間の価値を相対化することにはつながらない。
むしろそこでは、どのような様式を創造するか、あるい
はどの様式を選択するかは、〈論理〉ではなく〈倫理〉
の問題となるのである。(じじつ、マンゾーニの日常言
語への志向は、きわめて倫理的な意味づけをもってい
た。)

わたしたちは、散文が言語の自然で基本的な状態であ
ることになんらうたがいをもたない。けれども、散文こ
そはある歴史的条件のもとではじめて成立した言語様式
なのである(じじつ散文の成立は韻文の成立よりもおそ
いのがふつうだ)。「わたしたちは日常生活で散文を話し
ている」というジュールダン氏の町民貴族的意見に賛同
するならばはなしはべつだ。けれどもわたしたちが散文
の歴史的様式性に無感覚であるのは、わたしたち自身が
「散文的世界」に住んでいるからなのかもしれない。⁽⁴⁴⁾

さきあげた引用文でアスコリが「散文、統辞、言
語」を等位接続詞でむすぶのをみておどろいてはならな
い。ラングとパロールの峻別になれたわたしたちからは、

アスコリが言語体系と言語運用の区別を無視しているかのようにみえる。けれども吟味してみなければいけないのは、むしろ慣れしたしんだ言語学的自明性のほうだ。

マンゾーニの意図したのは〈文体〉の改革であったのか、〈言語〉の改革であったのかという議論がしばしばなされている⁽⁴⁵⁾。けれども、この問いが前提としているのは〈言語〉と〈文体〉とのあいだにのりこえがたい障壁をみる近代言語学のとらえかたである。しかし、言語をコミュニケーションの道具としてしかとらえない言語学は、つねにある種の文体を言語の基本的で標準的な状態として仮定している。さまざまな文体はその基準にしたがって偏差として分類される。じつはこのような作業は、文体のゼロ度をしめす近代的散文の成立をまっしてはじめて可能なのだ。

〈匿名のことば〉である言語の中間体が成立することは、さらにその言語的表象を交容させずにはおかない。なぜなら、特定の間人、場面、コンテクストに帰属せずあらゆる可能な事物の状態の中立的記述を可能にする(かにみえる)言語様式がこころして成立することによって、はじめて「それ自体としての言語」といふものが表

象できるようになるからだ。

さまざまな言語様式の配置と言語の全体的表象との関連の問題は、いまだ十分に究明されているとはいえない。マンゾーニとアスコリ、さらにイタリアの〈言語問題〉全体が問いかけているのは、じつにこのことなのである。

(1) これらの著作はすべて Manzoni, A., *Scritti linguistici*, a cura di F. Montebasso, Milano, Paoline, 1972 に収録。

(2) Ascoli, G. I., *Il Proemio all'Archivio glottologico italiano*, in Id., *Scritti sulla questione della lingua*, a cura di C. Grassi, Torino, Einaudi, 1975.

(3) Vitale, M., *Questione della lingua*, Palermo, Palumbo, 1979².

(4) Scaglione, A. (ed.), *The Emergence of National Languages*, Ravenna, Longo, 1984; *The Fairest Flower. The Emergence of National Consciousness in Renaissance Europe*, Firenze, Accademia della Crusca, 1985; Joseph, J. E., *Eloquence and Power*, London, Frances Pinter, 1987.

(5) Salani, T. P., *Per lo studio dell'italiano*, Padova, Liviana, 1986, p. 8.

(6) De Mauro, T., *Linguaggio e società nell'Italia d'oggi*, Torino, ERI, 1978, p. 10

- (7) De Mauro, T., *Storia linguistica dell'Italia unita*, Bari, Laterza, 1970², 1976, p. 43.
- (8) *ibid.*, pp. 287—288.
- (9) *ibid.*, p. 32.
- (10) Manzoni, *op. cit.*, p. 144.
- (11) *ibid.*, p. 145.
- (12) 語形の「自然的選択」をとうじた共通語形成をのぞむアスコロの立場は、『標準語と方言』（定本柳田国男集第十八巻所収）における柳田国男と酷似している。
- (13) Ascoli, *op. cit.*, pp. 23—24.
- (14) Manzoni, *op. cit.*, p. 157.
- (15) *ibid.*, p. 283.
- (16) *ibid.*, p. 156, 158.
- (17) 藤岡勝二「言文一致論」（一九〇一）吉田澄夫・井之口有一編『明治以降国語問題論集』風間書房、一九六四年三四四—四五。
- (18) Ascoli, *op. cit.*, p. 14.
- (19) *ibid.*, p. 17.
- (20) ノルニは、言語の共時態をめぐる考察でのマンノン・マンノートの類似性を指摘している。Bruni, F., *Per la linguistica generale di Alessandro Manzoni*, in Albano Leoni, F. et al. (cur.), *Italia linguistica: idee, storia, strutture*, Bologna, Mulino, 1983, pp. 73—118.
- (21) この『新辞書』は、マンノートの弟子のニコルニ

- の編集は一九二〇年に第一巻が刊行されるが（完結は一九七年）『題名の“novo”にあからぬにあらわれたマンノニ語法——共通語は“novo”——がアスコロの憤激をひききったのである。』
- (22) Ong, W. J., *Orality and Literacy*, London, Methuen, 1982.
- (23) Manzoni, *op. cit.*, pp. 307—308.
- (24) *ibid.*, p. 139.
- (25) *ibid.*, p. 259.
- (26) Lapiere, J. W., *Le pouvoir politique et les langues*, Paris, PUF, 1988, p. 123.
- (27) Durante, M., *Evoluzione storica del rapporto tra lingua e dialetti in Italia*, in *Lingua, dialetti, società. Atti del Convegno della Società Italiana di Glottologia*, Pisa, Giardini, 1979, pp. 13—27.
- (28) Lo Piparo, F., *Lingua intellettuale egemonia in Gramsci*, Bari, Laterza, 1979, p. 69. この『體維』のロービロの解釈に負かたひがきやが。この『体維』の「歴史のフロンティア」の概念が念頭にきかれてくる。
- (29) Ascoli, *op. cit.*, p. 12.
- (30) *ibid.*, pp. 34—35.
- (31) 藤岡と Raich, M., *Scuola, cultura e politica da De Sanctis a Gentile*, Pisa, Nistri-Lischi, 1981, pp.

425—431 方言学をめぐって

- (22) Ascoli, *op. cit.*, p. 32.
- (23) Dardano, M., *G. I. Ascoli e la questione della lingua*, Roma, Istituto della enciclopedia italiana, 1974 255—262頁。この中で、Ascoliが民族言語学を提唱したのには、地方のクリンツァ（独特な民族語）に由来したことが、その複数言語并発の重要な要素であると指摘されている。
- (24) Beccaria, G. L. et al., *L'Italiano letterario*, Torino, UTET, 1989, p. 148.
- (25) Caretti, L., *Manzoni. Ideologia e stile*, Torino, Einaudi, 1974.
- (26) Matarrese, T., *Il pensiero linguistico di Alessandro Manzoni*, Padova, Liviana, 1983, p. 7.
- (27) Ascoli, *op. cit.*, p. 31.
- (28) *ibid.*, pp. 30—31.
- (29) Fanfani, P., *Lingua e nazione*, Milano, Paolo Carrara, 1872, p. 46.
- (30) 上記書籍に De Mauro, T. et al. (cur.), *Lingua e*

dialetti nella cultura italiana da Dante a Gramsci,

- Messina-Firenze, D'Anna, 1980, pp. 151—157 256頁。
- (31) Raicich, *op. cit.*, pp. 97 ff.
- (32) De Sanctis, F., *Manzoni, a cura di C. Muscetta*, Torino, Einaudi, 1983, p. 105.
- (33) Bruni, F., Intorno alla prosa delle “Osservazioni sulla morale cattolica”: implicazioni linguistiche e filosofiche, in Manzoni “*L'Eterno Lavoro*”. *Atti del Congresso Internazionale sui problemi della lingua e del dialetto nell'opera e negli studi del Manzoni*, Milano, Casa del Manzoni, 1987, pp. 91—140.
- (34) Kittay, J. /Godzich, W., *The Emergence of Prose*, Minneapolis, University of Minnesota Press, 1987.
- (35) 上記書籍に Sabatini, F., Questioni di lingua e non di stile. Considerazioni a distanza sulla morfosintassi nei “Promessi Sposi”, in Manzoni “*L'Eterno lavoro*”, *cit.*, pp. 157—176.

(編者大寺助教授)